



地域に貢献し、地域で学ぶ活動
教養C群サービスラーニング科目

2023年度 シチズンシップ・スタディーズ 活動報告会 資料集

立命館大学サービスラーニングセンター
衣笠 有心館1階

Tel: 075-465-1952 / Fax: 075-465-1982

B K C アドセナリオ1階

Tel: 077-561-5910 / Fax: 077-561-5912

O I C A棟1階AN事務室

Tel: 072-665-2195 / Fax: 072-665-2059

(窓口時間：平日 10:00～17:00)

サービスラーニングセンターE-mail: ritsvc@st.ritsumei.ac.jp

サービスラーニングセンターHP: <http://www.ritsumei.ac.jp/slc/>

目次

はじめに

シチズンシップ・スタディーズとは	P.1
活動報告会 次第	P.2
次第【ポスターセッション時間割】	P.3

発表資料

時代祭応援プロジェクト	P.4~5
堂本印象美術館広報プロジェクト	P.6~7
衣笠キャンパスプロジェクト（フジバカマ）	P.8~9
草津宿映えスポットMap製作プロジェクト	P.10~11
草津ブランドのPR戦略を考えるプロジェクト	P.12~13
草津市×立命館 大学生のまち活応援プロジェクト	P.14~15
茨木みずとわプロジェクト ～持続可能な食を考える～	P.16~17
団地コミュニティの活性化 ～まちづくりの面白さを知ろう～	P.18~19
国際理解教育外国人 サポーター派遣事業	P.20~21

報告会に寄せて （担当教員からのメッセージ）

楽じゃなく楽しく、その「型」を身につけて（山口 洋典 先生）	P.22
社会と自分のつながりを考える（小辻 寿規 先生）	P.23

シチズンシップ・スタディーズとは

ーボランティア活動を通して地域で学ぼう！ー

「シチズンシップ・スタディーズ」は、2020年度まで開講してきた「シチズンシップ・スタディーズI」での経験を基盤に、学生実態に合わせて2020年度教養改革で、半期科目として設置した立命館大学サービスラーニングセンターが開講する正課科目です（課外活動ではありません）。この授業は、受講生がボランティア活動を通じて地域に貢献しつつ、地域社会の一員としての自覚と能力を育み、専門知識の応用的な理解を深めることを目標としています。

ボランティア活動は、大学のキャンパス内だけでは得られない、かけがえのない経験を受講生にもたらししてくれます。さらに、地域で活動を行うことは、自らが暮らす地域をこれまでとは違った視点で捉えることを可能にするだけでなく、大学で学ぶ知をいかに地域で活かせるかを学ぶ契機となります。ボランティアプログラムの開発・運営にあたっては、大学やサービスラーニングセンターが地域や海外等も含めた行政、公的機関、NPO、地域組織などと協定（覚書）を締結した上で実施します。ボランティア活動の期間は、数日程度の短期で行うものから、数ヶ月程度の長期で行うものまでさまざまです。受講生が自身の興味や関心に沿って、参加するボランティア活動を選択することができます。

ボランティア活動の魅力を体感しながら、大学で学ぶ知に生きた風を呼び込んでください。

ーボランティアだけど奉仕活動じゃない。授業だけど講義じゃない。

それがサービスラーニング！ー

「シチズンシップ・スタディーズI」は、「奉仕活動」ではなく「ボランティア教育」プログラムです。ボランティア教育とは、体験的学習の一形態で、ボランティア活動を中心に事前・事後の学習（研修・振り返り）を組み、明確な教育目的に基づいて行われる教育プログラムです。よって、ボランティア活動を通じて、他者や地域（コミュニティ）の役に立つだけでなく、そこから学習効果を得られるよう設計されます。この点が、純粋な「奉仕活動」との違いです。単にボランティア活動に参加すれば、単位が認定されるというわけではありません！ボランティア活動を通して何を学びたいのか、確かな問題意識をもって取り組むことが重要です。

また、このような教育手法は、欧米ではサービスラーニング(service-learning)またはコミュニティサービスラーニング(community service-learning)と呼ばれています。

2023年度実施プロジェクト・プログラム一覧

2023年度は、下記の地域団体にご協力いただき、42名の受講生を受け入れていただきました。

開講キャンパス	クラス	プロジェクト名	受入団体	担当教員
衣笠	GA	時代祭応援プロジェクト	平安講社 第八社	山口洋典
		堂本印象美術館広報プロジェクト	京都府立 堂本印象美術館	
		衣笠キャンパスプロジェクト（フジバカマ）	衣笠キャンパス地域連携課	
BKC	G1	草津宿映えスポットMap製作プロジェクト	草津市（教育委員会）	小辻寿規
		草津ブランドのPR戦略を考えるプロジェクト	草津市（商工観光労政課）	
		草津市×立命館 大学生のまち活応援プロジェクト	（公財）草津市コミュニティ事業団	
OIC	GV	茨木みずとわプロジェクト ～持続可能な食を考える～	（一社）みずとわ	山口洋典
		団地コミュニティの活性化 ～まちづくりの面白さを知ろう～	茨木市社会福祉協議会	
		国際理解教育外国人サポーター派遣事業	（公財）大阪府国際交流財団	

活動報告会 次第

【開催日時】 2024 年1 月14 日（日） 13：00～16：10

【開催場所】 立命館大学 大阪いばらきキャンパス
フューチャープラザ1階イベントホール（B棟1階）

【スケジュール】

時間	プログラム
13:00～13:15	オープニング
13:15～13:45	ブリーフィング
13:50～14:10	第1セッション
14:15～14:35	第2セッション
14:35～14:45	休憩
14:45～15:05	第3セッション
15:10～15:30	第4セッション
15:35～15:55	受入先講評
15:55～16:05	教員講評
16:05～16:10	事務連絡（レポート提出等について）

活動報告会 次第

【ポスターセッション時間割】

チーム コード	プロジェクト名	セッション ①	セッション ②	セッション ③	セッション ④
GA_1	時代祭応援プロジェクト	発表	発表	発表	発表
GA_2	堂本印象美術館広報 プロジェクト	×	発表	発表	発表
GA_3	衣笠キャンパス プロジェクト（フジバカマ）	発表	発表	発表	発表
G1_1	草津宿映えスポットMap製作 プロジェクト	発表	発表	発表	発表
G1_2	草津ブランドのPR戦略を考 えるプロジェクト	発表	発表	発表	発表
G1_3	草津市×立命館 大学生のまち活応援 プロジェクト	発表	発表	発表	発表
GV_1	茨木みずとわプロジェクト ～持続可能な食を考える～	発表	×	×	発表
GV_2	団地コミュニティの活性化 ～まちづくりの面白さを知ろ う～	発表	×	発表	×
GV_3	国際理解教育 外国人サポーター派遣事業	×	発表	×	発表

※当日の状況により、一部変更する場合があります。

2023 年度時代祭応援プロジェクト

メンバー：岩瀬・小野・川村・河盛・倉田・塩津
竹原・中西・深田・堀田・本間・宮本

1. プロジェクト概要

①時代祭応援プロジェクトとは

- ・役員の高齢化による運営の困難を学生の協力により軽減し、共に時代祭を盛り上げる
- ・時代祭ならびに地域活動への参加を通して、京都の歴史・文化と地域の実情・課題を学ぶ

②受け入れ団体について

- ・時代祭を運営する市民団体「平安講社」のうちの一つである「平安講社第八社」
- ・大正 10 年に朱雀学区の市民によって組織され、明治維新時代の維新勤王隊列を担当

2. 時代祭とは

- ・平安神宮の大祭であり、京都三大祭の一つ
- ・平安神宮の創建と平安遷都 1100 年を記念し、明治 28 年に開始
- ・平安遷都の日である 10 月 22 日を京都の誕生日とし、毎年その日に開催
- ・時代装束姿の京都市民約 2000 人が 8 時代を 20 列に分け、時代をさかのぼりながら行進

3. 活動スケジュール

日付	活動	概要
9 月 20 日	オリエンテーション・入隊式	時代祭に関する説明、平安神宮の案内
9 月 21 日～	隊士練習補助	隊士練習の準備、片付け、役員さんにインタビュー
10 月 14 日	衣装渡し	時代祭で使用する隊士の衣装状態確認
10 月 15 日	宣状式	時代行列の参役に選ばれた参加者が無事執行を祈願
10 月 22 日	時代祭	男性受講生：維新勤王隊・女性受講生：志士列
10 月 29 日	衣装戻し	時代祭で使用した衣装の状況確認、収蔵庫への収納
11 月 4 日	あかしやふれあい祭	朱四小で行われる祭、運営の手伝い
11 月 5 日	東和学区防災訓練	東和学区の防災訓練、運営の手伝い（応急担架等）
11 月 20 日	消防団夜回り	朱四消防分団の方たちとの夜回り
11 月 23 日	朱八防災訓練	在宅避難について、運営の手伝い・見学

4. まとめ（学びと発見した課題）

- ・地域社会の成り立ちや現状、そして時代祭をはじめとする京都の歴史や文化を認識、理解
- ・実際に現場に出て、体験することの重要性
- ・主体的、能動的に動くことの重要性和難しさ
- ・地域活動の担い手の高齢化、特に若者における地域離れの加速

5. 自主企画

<第 1 グループ>

- 成果目標：衣笠キャンパスの立命館大学生を対象に在宅避難について周知し、当該学生が在宅避難という選択肢を持てるようにする
- 行為目標：1. 在宅避難についてまとめた資料を、ポスター・manaba+R 及び動画配信サー

ビスを通じて発信する

2.1 と同時に発信したアンケートを通じて人数や得られた知識量を吟味する

○企画内容

- ・背景：1. 活動の中で防災訓練に参加した際に、大学生の参加がなかったことから、大学生の防災意識と大学生と地域の関係性の低さを課題に感じた
2. 避難所の様々な問題から、在宅避難の情報を発信し一つの選択肢として持てるようにすることが、地域・学生双方にとってより良い選択肢であると考えた
- ・目的：立命館大学生が在宅避難という選択肢を持てるようにする
- ・内容：在宅避難に関する情報をまとめた動画を、ポスター・manaba+R及び動画配信サービスを通じて発信する
- ・展望：動画を発信し、学生からのリアクションが得られ次第まとめていく

○反省と学び

- ・班内外での情報共有不足→班内だけでなく地域の方とも密に連絡を取り合う必要がある

<第2グループ>

○成果目標：八社の地域住民が時代祭と八社の取り組みについての理解を深め、時代祭に興味を持つようにする

○行為目標：時代祭に向けた活動をまとめ、活動で得た受講生の学びも記載した暦を作成する

○企画内容

- ・背景：地域住民だけでなく、役員の中にも活動内容を把握できていない人が多い
- ・目的：準備段階から参加したからこそ感じた気づきや学びを八社全体に共有することで時代祭への理解を深め、興味を持ってもらう
- ・内容：時代祭に向けた活動の暦を作成し、活動概要と自分たちの気づきや学び、課題を記載する
- ・展望：それぞれの活動に対する気づきや学びを共有し、今後資料を作成する

○反省と学び

- ・本プロジェクトの本質を見失っていた→自ら目的をもって活動に参加することの重要性
- ・情報共有不足→メンバーや地域の方と連携するためには、密なコミュニケーションが必須

<第3グループ>

○成果目標：立命館大学生が地域社会の重要性を理解し、近所の方と普段からコミュニケーションをとるようにする

○行為目標：立命館大学周辺にある飲食店と地域情報を紹介するフリーペーパーを作成する

○企画内容

- ・背景：防災や教育などの観点から地域社会は重要であるが、地域社会を維持していくために不可欠な次世代の地域活動参加率が低い
- ・目的：地域参加において重要な、日常的なコミュニケーションのきっかけを作る
- ・内容：1. 衣笠キャンパス周辺の飲食店の紹介と地域社会や活動の情報を提供するフリーペーパーを作成する
2. 学内の設置やデジタルでの配信を通じて配布する
- ・展望：取材するお店の選定と取材ができ次第、フリーペーパーを作成する

○反省と学び

- ・着想時期が遅かった→先を見通して計画的に動く重要性
- ・行為目標の効果の大きさが不透明→他者に目的どおりの行動をしてもらう難しさ

2024 年 1 月 14 日

名前: 栗和奏、中村俊貴、宮川福生

堂本印象美術館広報プロジェクト活動報告会

堂本印象美術館とは

日本画家として京都で活動した堂本印象が 1966 年に個人で設立。建物全体からドアノブまで堂本印象のデザインとなっている。1992 年に京都府立堂本印象美術館となる。立命館大学衣笠キャンパス正門の正面に位置する。

1. 現状分析

○来館者の減少・コロナ禍を通し、年間来館者数は 6 万人→3 万人弱と 6 割減少(2021 年から回復傾向)・入館者の多くは高齢者などの無料来館者(季節における増減が激しい)有料来館者は通年安定。新規入館者の内 6 割超が初めて来館した方。

⇒既にある Instagram や X などの SNS を活用して新規来館者獲得。安定した集客と収益の確保が求められる。

・社会との関係をつくる)という手段の利用が重要。

・SNS がどのように使われているのか、利用者達を想像することが課題。

2. 目標

成果目標:美術館が、初めて京都に訪れた人にとって鑑賞者として最初に訪れたい場所になる。

行為目標:初めて美術館に行くきっかけを作り、新規のお客さんを増やす。

3. 活動概要

○SNS を活用したキャンペーン

堂本印象美術館に関する SNS 記事を投稿したユーザーに対して、美術館の窓口にてポストカードをプレゼント。

○学生による広報活動

学生が学内で堂本引用美術館の展覧会に関するチラシを配布、設置。チラシを持参した来館者に対して美術館の窓口にてポストカードをプレゼント。(図で説明)

- ・企画を進める上での、タスク細分化、スケジュールの明確化、企画書作成、
- ・引換券・チラシの作成
- ・配布、配架場所の決定、許可取り

<u>10月</u>	美術館来館、連携先との概要共有、目標設定
<u>11月</u>	企画土台作り、企画の細分化、タスク・スケジュール設定、企画書制作、
<u>12月</u>	引換券制作、配布場所決定、許可取り、配布(12日)、配架

4. 活動で直面した問題

①企画組み立ての困難さ

アイディアの出し合いやメンバー各々が企画をプレゼン。

→企画設計に対し慎重になり時間をかけてしまったため、多くの事を試す時間がなくなってしまった。「早く始めるほど様々なことに挑戦できる」という事を学ぶ。

②連携先との意思疎通

企画書やガントチャート、引換券の制作

→先生や連携先の方が知識や情報として伝えてくださった事が、うまく企画書やガントチャートに反映できていない。企画書や引換券の制作において、自分達の力で組み立てる事があまりできず、連携先の方に頼る事が多かった。

③配布において手に取ってもらえない(対象まで広報が到達しない)

12月12日8時半頃～10時頃、衣笠キャンパス東門・正門前にてチラシ＋引換券の配布。

→受け取る人は教授や留学生の方が多く、若者にあまり届かない。しかし、100人規模の抗議で直接配布させて頂くなど、1人でも多くの鑑賞者に届くように工夫した。

フジバカマプロジェクト報告会レジュメ

五十嵐佳 佐野亮太 野田遥希 山崎純也

1. フジバカマとは

- ・京都府の絶滅寸前種に指定されている植物
- ・秋の七草の1つで、9月下旬には薄紫色の花が咲く
- ・万葉集や源氏物語などの昔の作品にも登場する
- ・フジバカマの花にはアサギマダラという渡り蝶が好んで飛来する

2. 嵐電沿線フジバカマプロジェクトの目的

「挿し芽でふやす→植える→観察する→収穫する→上手に使う→芽が出る→挿し芽で増やす」というフジバカマの栽培サイクルを地域連携による協働・ネットワークを通じて行うことで、SDGsの目標15「生物多様性損失の阻止」、目標17「パートナーシップで目標を達成しよう」を目的としている。

3. 活動の目標

成果目標：匂い袋づくりのイベントが嵐電沿線住民の交流をする場になる

行為目標：私たちが匂い袋のワークショップを開催する

4. イベントの開催経緯

嵐電沿線フジバカマプロジェクトに関わる沿線住民の活動に一体感がなかった。

→「活動が点だけど線にしたい」、「お互いのフジバカマの保全活動を知る機会に」という思いからイベントを開催した。

5. イベントの内容詳細

【草木染め体験】

日時：11月25日（土）9時～12時

場所：嵐電御室仁和寺駅（駅前広場）

イベント内容：染め師の山本さんのレクチャーのもとハンカチのフジバカマ染めを行った

参加者：緑化メンバー、御室小学校の生徒、立命館大学の学生、京福電気鉄道株式会社の社員、フジバカマプロジェクトの関係者

【匂い袋づくりイベント】

日時：12月9日（土）9時～11時

場所：立命館大学衣笠キャンパス 末川記念会館

イベント内容：小学生がフジバカマンなどのシールを使用してオリジナルの匂い袋を学生と共に作った

参加者：立命館大学の学生、小学生 10 名、幼稚園児 1 名、保護者、フジバカマプロジェクトに関わる地域住民

5. アンケート結果をもとに、どんな効果があったか

・ イベントで楽しかった事は何ですか？

の項目のうち「デザイン」「おにいさんとおねえさんとのおはなし」が高かった（11 人中 10 人回答）そのため、デザインの部分では、フジバカマンをうまく活用できた。また、小学生と大学生との交流ができたといえる。

・ フジバカマイベントにまた来たいですか？

の質問に対し「はい」と答えたのが 100%だった。そのため、フジバカマに興味を持ち、次の参加者が増えることが見込まれる（嵐電沿線フジバカマプロジェクトに関わる住民が広がる）

6. まとめ

25 日の草木染めイベントでは、京福電気鉄道の社員、緑化メンバー、立命館大学の教職員・学生、御室小学校の生徒・保護者などの嵐電沿線フジバカマプロジェクトに関わる嵐電沿線住民との交流ができた。

一方、9 日の匂い袋づくりイベントでは、小学生と大学生との交流は出来たが嵐電沿線住民との交流できなかった。しかしながら、今までのつながり（御室小）だけでなく新しいつながり（金閣・衣笠小）ができた。

シチズンシップ・スタディーズ 活動報告

～草津宿映えスポット Map 製作プロジェクト班～

2024 年 1 月 9 日

久保田貫太
檜皮明音
松尾映希
奥野雄登
任弘哲
松島結子
吉川葵

1. 本プロジェクトの目標

本プロジェクトは、草津市教育委員会、草津市草津宿街道交流館と協働し、草津街道周辺の魅力あるスポットをマップとして製作するために開始された。草津宿を外部からの視点で見て魅力や新鮮味あるポイントを発見するため、我々立命館大学の学生と協働してマップ製作を行った。若い世代から社会人を主な対象者とし、注目を集めて手に取ってもらい、草津・草津宿についてより知ってもらうような地図の製作を目指す。

2. 草津宿、協力団体草津市草津宿街道交流館について

草津宿は滋賀県草津市草津駅から 10 分ほどの距離にあり、江戸時代に東海道と中山道が分岐、合流する宿場として栄えた場所で、現在でも歴史的な建造物、店が連なっている。草津宿街道交流館は、その街道中ほどに位置する歴史資料館である。館内には資料や写真、また江戸時代の草津宿の賑わいや、旅の様子を物語る資料を展示して、訪問客に草津の歴史・文化を紹介している。

3. 開催するまでの過程・難題

まずは草津宿周辺について知り、マップ材料を集めるためにまち探索を行った。住民や店の方にもご協力いただき、取材や撮影の許可を取った。メンバー個々で写真を撮影し、中心の通りから、裏の路地まで探索し、情報を収集した。

次に 11 月 2、3 日に「草津街あかり」というイベントに参加した。草津宿本陣近くで行われる 19 年間続くライトアップイベントである。草津川跡地、草津宿本陣などの昼間とは一風違った夜の姿が美しく照らされる。我々はイベント当日、主に本陣での運営に携わり、加えてマップ製作に関する訪問された方へのアンケート調査の実施、他のスポットの写真撮影などを行った。多世代にわたる方が本陣に訪問されることを見込み、アンケート調査媒体を紙と QR コード経由の google form に分けどちらでもアンケートを実施できるようにした。総勢 70 名の方にご協力をいただき、目を引く地図の要素や草津宿の魅力に関する情報

を収集できた。順路に沿って通過されていく中、訪問された方に協力をいただくのは困難だったが、撮影スポット近くで携帯を使用されているときに QR コードを読み取ってもらう計画で多くのデータを収集できるよう工夫した。

また 11 月 19 日みなくさまつりに参加して、「射的クイズ」と、街あかりに参加した際に私たちが撮影した「写真」を展示した。射的クイズでは、私たちが作成した草津に関わるクイズを出題した。クイズを射的の的にした奇抜なこの企画では、ご高齢の方から家族連れの方まで楽しんでいただき、来場者の人にクイズを通して、草津宿について知ってもらうことができた。写真の展示では、街あかりの際に撮影した厳選写真を展示した。今までに街あかりに足を運んだことがない人にも写真を見てもらうことで、草津宿・街あかりの情報発信をすることができたと思う。

終盤では草津宿にある「えふえむ草津」にてラジオによるマップの広報を行った。草津宿を外部から見たときの魅力を伝えるとともに、特に注目してもらいたい地図のポイント、学生の得意を活かした要素を盛り込んだ部分の宣伝を行った。

4. 協力団体の紹介

草津市立草津宿街道交流館、史跡草津宿本陣、くさつ夢本陣、喫茶トリコロール、松利老舗、抹茶庵けんしん、Lagom BAKESHOP、ベーカリー&カフェ協本陣、浄教寺、傳久寺、圓融寺

5. 地図概要

若い世代・社会人を対象に、カフェなど休日に訪れたいような情報をまとめた。アンケート調査で「写真・手書きの絵が多用された地図のどちらに興味を持ちますか？」という質問の結果から、前者に多くの票があったため、地図には写真を多用し、視覚的に魅力を伝えるような形式を採用した。まち巡りの際、荷物にならないように電子媒体での閲覧ができるデジタルの地図にした。

6. 企画から学んだこと・感想

大学生になり、草津市に住んでいるが、この授業に参加しなければ草津街道の魅力に気づくことができなかった魅力がたくさんあった。アンケート調査をすることで、私たちだけでは気づくことのできない課題を発見することもできた。

また、今まで店舗の方とお話する機会はほぼ無かった。しかし、企画を通じて交流館の皆様、草津宿近辺の皆様と関わる機会をいただき、草津・草津宿の魅力と住民の方々の内情や悩みについて知ることができた。歴史ある、多世代にわたる人々が協力して作り上げている、この貴重な土地の継続的なまちづくりに貢献したいと思う。

草津ブランドのPR戦略を考えるプロジェクトチーム

メンバー紹介：片岡 柚月・蝶野 叶・堤 愛芽・東 春奈・松尾 桃花

1. 活動目的

まず、私たちの当プロジェクトの選択理由を2点挙げる。1点目は人間性を豊かにし成長するためだ。当プロジェクトは老若男女様々な人とコミュニケーションを必要とすることや対人間に向けて行う活動が多く、常に人と関わりを持つ。人の微妙な心の変化を直に感じることや社会人との対人関係など貴重な経験を豊富に体験する。これらの経験は人間性に良い影響を与え、自分自身を改善し試行錯誤を行うことで成長に繋がる。2点目はブランドの紹介に興味を持っているためだ。PRに携わり、大規模で周知させようとする経験は学生ではなかなか出来ない。また、学生生活を送る、第二の故郷となる草津市のことを学び、広めたい思いや住んでいた・通っていた地域のことを何も知らずに去るのは寂しいという思いがある。さらに、私たち学生にしか出来ない魅力を同じ大学の学生や、学生と交流する地域の方にも知ってもらいたい。以上2点がプロジェクト活動の軸にある。

2. 草津ブランドとは

草津市における地域産業の活性化と市のイメージアップを目的に、平成26年12月設立の草津ブランド推進協議会が認証した、草津市内の魅力な地域資源のことで、地元をはじめとする多くの人に愛され、全国に誇れる草津ブランドを目指している。

<草津ブランド認証商品一覧>

草津あおばな	草津あおばな会
草津メロン	JA レーク滋賀草津野菜センター
愛彩菜	
琵琶湖からすま蓮根	
琵琶湖元気アスパラ	
近江草津米 匠の夢	JA レーク滋賀営農購買課
うばがもち	株式会社南洋軒
東海道草津宿 天井川	古川酒造有限会社
純米吟醸 草津政所・単式蒸留焼酎 大吟醸粕取り焼酎 草津政所	太田酒造株式会社
松里みかさ・松里もなか	松利老舗
瓢箪	株式会社瀬川元 瓢泉堂
金属工芸品	銀峰工房
草津焼	淡海陶芸研究所
ロートアイアンによる鉄製品	株式会社ナルディック
鍛造による鉄製品（日本刀）	田中貞豊鍛刀場

3. 今回インタビューを行った草津ブランド

・草津あおばな/草津あおばな会 ・松里もなか・松里みかさ/松利老舗/ ・うばがもち/株式会社南洋軒

私たちは上記の草津ブランド認証商品に注目した。理由は自分たちが特に興味が惹かれたことを前提に、ブランド同士のコラボ商品を視野に入れていたためである。コラボに着眼点を置いた理由は昨年先輩方の功績やPRに最も有効な手立てだと考えたためである。

最初に自分達から草津ブランドについてよく知るためにそれぞれにインタビューに伺った。

4. インタビューから得たこと

インタビューを受けてくれた方々は丁寧でとても親切だった。直接会ってお話を伺うことにとても緊張していたが、生産者さんの思いが伝わり、緊張よりも探究心が強くなった。実際に自分で見たり体験したりすることで計画が思うように進行しないことや新たな案が出てきた。インタビューによってコラボするには条件を満たせないことが分かった。しかし、これからの PR 方法を模索するヒントを得ることも出来た。

5. 草津ブランド商品コラボに向けて

あおばな・うばがもち・松利老舗の商品のコラボを実現しようと試みたが商品の相性の問題などの理由で断念し、現在はあおばなとのコラボに向けた話を生協の方と進めている。あおばな粉を用いた商品のレシピ発案をするとともに、実際に生協内で販売できる商品かどうか検討を行っており来年の夏を目標にあおばなと生協のコラボ実現を目指している。

6. ウェルカムデーの成果

11 月 4 日の BKC ウェルカムデーで私たちは、ブースで草津ブランド推進協議会のInstagramのアカウントをフォローしてくださった方（主に親子で来場している層）に、草津ブランド認証商品であるあおばなや、日本刀の形のバルーンをお渡しした。事前に市役所に訪問し作り方を学び、その後の授業でバルーン作成の練習を行い当日に備えた。この活動では、素直に意見を言ってくれる上に感情表現が豊かな子供たちに草津ブランドの魅力を伝えることが求められていたので、端的にわかりやすく草津ブランドについて紹介する力を鍛えられ、意義のあるイベントにすることができた。他にも、草津ブランド認証商品の展示を行っていたため多くの方が草津ブランドについて興味を持つ機会を作ることができた。

7. 草津ブランド市の成果

11 月 18 日の草津ブランド市でお客さんに草津ブランドに関するアンケートの実施と回答者に向けた草津ブランド商品の抽選会を実施した。そこで、草津ブランドの知名度に偏りがあることや草津ブランドという言葉があまり浸透していない事実を知った。他にも地元の人が草津ブランドに感じていることや、草津ブランド認証商品は自分で買うだけではなく手持ち土産で利用するという声を聞き草津ブランドの知名度を上げるためにはどうすればいいのかを考えるきっかけになり、私たちも今以上の草津ブランドについての知識を持つ必要があると感じた。

8. Instagramでの活動

授業の活動の様子や取材に伺った 3 カ所の事業所様のチラシを作成し、Instagramに投稿した。また 2 つのイベントの活動報告のリール動画を作成し、フォロワーに対して草津ブランドの魅力を伝え活動の様子を知ってもらうことができた。投稿に興味を持ちフォローしてくださる人がいたため、やりがいを感じる広報活動ができたと感じている。

9. まとめ

・インタビューによりそれぞれの商品に対する思いや、草津ブランドの知名度を上げる難しさについて学ぶことができた。

・イベントを通して草津や近隣市町からの来場者の方と話すことで私たちが持っていた草津に対する考えとの違いを感じ、草津には誇るべき多くの伝統があり次世代まで守っていく必要があると考えた。

・コラボ商品の実現は双方の理解があって成り立つものであり意見を尊重しながら考える必要があることを知り、私たちが伝えたい草津ブランドに対する思いが消費者の需要に合っているのかを考えながら交渉する難しさを学ぶことができた。

草津市×立命館 大学生のまち活応援プロジェクト 活動報告

岩崎彰馬（経済学部・3 回生）、菊池匠真（経済学部・2 回生）

東出慎悟（経済学部・2 回生）、三浦美涼（理工学部・2 回生）

二宮瑛祥（情報理工学部・2 回生）

1. 本プロジェクトの概要

本プロジェクトは、中間支援組織である草津市コミュニティ事業団と協働し、草津市のまちづくり協議会などのまちづくり団体と立命館大学生団体の交流機会を作り出すためのマッチング会を企画運営するプロジェクトである。草津市のまちづくり協議会はそれぞれの小学校区を代表する自治組織であるが、近年地域で活動をしている人たちが高齢化していることや、若い世代に情報が届かないなどの悩みを抱えている。一方で大学生はコロナ禍を機に活動機会が減ったことや、活動を地域で活かす方法がわからないなどの悩みを抱えている。これらの双方の悩みを解決するために 2 年前に始まったのが本プロジェクトであり、今年度で 3 年目となる。過去のマッチング会をきっかけにして、規格外の地場産メロンを使ったスイーツの商品開発や LINE 公式アカウントの開設企画など様々なアイデアが実現した。今年度は、昨年度よりもさらに交流を深めること、新たな出会いを創出することを目指して活動を行った。

2. 目標

大学生と地域のつながりをより深くしながら各地域での課題を解決に導いていくことを目的とし、そのために昨年度を上回るマッチング総数 15 件を達成することを目標とした。

3. マッチング会開催までの活動内容

* まちづくり協議会へのヒアリング

草津市内に 14 あるまちづくり協議会の内、6 協議会に対して、その地域の現状や困っていること、学生にどのようなことを求めているかなどについてヒアリングを行った。それぞれのまちづくり協議会によって異なる課題もあったが、「高齢化が進み、地域のまつりなどの企画がマンネリ化してきているので若い人からのアイデアが欲しい」「大学生と継続的な関わりを持ちたい」などの意見が多かった。

* 学生団体への声掛け

まちづくり協議会へのヒアリングを基にニーズに合いそうな学生団体をピックアップし、BKC ウェルカムデーやみなくさまつりなどの学生団体が出店するイベントでチラシを配布して声掛けをしたり、その団体の SNS アカウントの DM での声掛けをしたりした。

* FM ラジオ出演

マッチング会の広報活動として、コミュニティ FM「えふえむ草津」の「コミュニ tea time」という番組に出演した。番組内では、マッチング会の目的や、過去に学生団体とまちづくり協議会が連携して行った活動の事例、これまでの活動の感想、マッチング会開催に向けての意気込みなどについて話した。

4. 当日について

* 参加団体

- ・まちづくり協議会などのまちづくり団体：

まちづくり協議会 10 学区

(矢倉、常盤、渋川、大路、草津、南笠東、老上、山田、玉川、笠縫)

草津市まちづくり協働課、長寿の郷ロクハ荘、草津市男女共同参画センター

- ・学生団体：マジックプレイヤーズ、学生コーディネーター、学生団体カノール、立命館大学韓国人留学生会、Potential、LAPIZ PRIVATE、TOM SAWYER、食マネジメント学部 国枝ゼミ、BohNo、立命館料理サークル Gretel、ライフサイエンス研究会

* 当日の流れ

まず初めに各学生団体がプレゼンを行い、その後、まちづくり協議会が気になった学生団体のテーブルに行き 20 分間話し合うというセッションを 4 回行った。1 回目のセッションはあらかじめマッチングできそうな協議会と学生団体の組み合わせを指定し、2 回目以降は自由な組み合わせで行った。最後に各テーブルで話し合った内容を全体で共有した。

5. マッチング会の成果・感想

マッチング会では、地域のまつりでの科学実験教室、マジック、電子廃材のワークショップ、野菜絵の具のワークショップや定期的な高齢者向けの香りの講座、料理教室などさまざまなアイデアが出て、目標であるマッチング総数 15 件を超えることが出来た。参加した団体の数も過去最多となり、昨年よりもさらに交流を深めることが出来た。参加者アンケートでは、「来年度の事業に活かせる」「いい出会いをいただいた」などの意見もあり、大学生とまちづくり協議会双方にとってよい出会いの場となったことを実感した。また、「どこのまちづくり協議会にも共通した課題も多く、地域に大学生たちが来てくれるしくみがあればいい」「学生には単に手伝いをするのではなく、地域運営の中心にも入ってほしい」「定期的にマッチングの進捗を確認できる場が欲しい」との意見もいただいたので今後どうしたら実現できるのかも考えていきたい。今回 3 年目となるマッチング会の開催であったが、まちづくり協議会の方たちにとってこのイベントが少し定着してきていると感じたので、学生側にもさらに広めていきたい。

2023 年度シチズンシップ・スタディーズ

みずとわプロジェクト

ー報告レジュメー

「メンバー紹介」

野村明日香、松浦康平

「茨木市の北部地域について」

美しい里山の風景が広がり、都市へのアクセスが便利な地域で、新鮮な農産物が収穫される自然に恵まれた場所です。ここは都市の活気と自然の静けさが共存する特別な地域でありながら、少子高齢化、人口減少、若者の流出といった課題にも直面しています。

「一般社団法人みずとわについて」

一般社団法人みずとわは、「水と〇（わ）で心を動かす」をミッションとし、事業の中心に「人の心を動かすこと」を据えています。彼らは循環の環を広げ、人々のつながりを深めながら、水を生命の源とし、自然との調和を大切にしたい生き方や社会の実現を目指しています。彼らのアプローチは、「どんな環境下でも、面白くサバイバルしていく」ことであり、そのために自治コミュニティを形成し、できるだけ自給自足の生活を重視しています。また、人間が地球全体に良い影響を与える方法を模索し、そのためににんげん小屋を開設しています。

「みずとわが感じている課題」

みずとわが直面している課題は、自然の恩恵を受けながら持続可能な生活を築くことが非常に重要であるという点です。彼らを含む農家たちは、地球温暖化や長雨などの気候変動の影響を受け、困難な状況に立ち向かっています。この問題は、みずとわの個々の意識だけでなく、社会全体が取り組むべき持続可能な課題でもあります。

また、日本国内での農産物の生産には主に化学肥料が使用されており、これらの肥料のほとんどが輸入に頼っています。もしも化学肥料の輸入が途絶えると、日本の食料自給率が1%未満に低下してしまう可能性があります。将来的には飢餓が発生するおそれもあるとの懸念が存在しています。

「課題解決に向けた向けた受け入れ先の挑戦」

持続可能な「食」を考え、できることを実践する。

「地域活動を行う上でのチームの目標」

みずとわさんの活動を理解し、みずとわの一員として持続可能な食について立命館大学生に広める。

「チーム目標にどれだけ近づけたか」

野村明日香：チーム目標には80%ほど近づけたのではないかと思います。20%近づけなかった理由としては、うどの収穫を手伝わなかったことが挙げられます。うどはみずとわにとって非常に重要であり、それに関われなかったことが、目標の100%達成に影響を与えました。しかし、他の活動では、ボランティア活動や皆さんとの対話を通じて、みずとわの活動内容を深く理解することができました。初めはみずとわの商品が学生には高価であるため、活動内容を理解できなかったのですが、学生が主なターゲットでないことや、私たち学生にもできることがあることに気づくことができました。

そのため、私は大学でみずとわの活動を発表し、留学生や日本人学生を含めて約10人が参加してくれました。彼らに対して水みずとわや持続可能な食について伝えることができ、この取り組みにより目標は大まかには達成できたのではないかと考えています。

松浦康平：チーム目標には自分的には7割ほど近づけたのではないかと考えています。まず、この秋学期にみずとわさんの活動に参加していく度にみずとわさんの活動を業務的な部分だけでなく、活動の裏にある想いの部分を理解出来たと思っています。いかにみずとわさんが地球の環境問題に危機感を覚え、自分たちで既存の農業から脱去しようとしているか。養鶏では鶏の命を考えての養鶏方法など、「食べられれば良い」では無くそれプラスアルファの考えを持って活動をしているということを理解しました。

また、自分たちがみずとわの一員として立命館大学に通っている自分たちの友人に対して持続可能な食についてのプレゼンテーションを行い、狭い範囲ではある「伝える」という活動が出来たと思います。しかし、私達の目標はより多くの立命館大学生に持続可能な食とみずとわさんの活動を伝えることなので、その点において身内にしか伝えられていないというのが足りない部分だと考えています。それに加え、自分自身みずとわさんに関わった期間がまだまだ短いという所から十分に理解したとは言いがたいと思っています。

「まとめ」

みずとわさんの活動に参加していく中で、メンバーそれぞれが「食」について考え沢山ディスカッションをしました。そのように考えることが一番大切なことであるということが分かりました。みずとわさんもそうして考えて今の活動をしているのだと思います。だから私達も考えて行動をしていかなければいけないと思います。また活動を通して互いを尊重し合える仲間を築くことが出来たと思っています。

団地コミュニティの活性化～まちづくりの面白さを知ろう～

- 報告レジュメ -

メンバー紹介・受け入れ団体

メンバー：大石名織 黒澤陽紀

受け入れ団体：社会福祉法人 茨木市社会福祉協議会

総持寺団地とは

大阪府茨木市と高槻市をまたがって建設された築 50 年以上の団地である。住民の構成は高齢化率 52.5%、世帯構成 1.4 人であり一人暮らしの高齢者が多い。一方で留学生や子供と暮らす家族での利用も一定数みられる。また 5 年前に自治会組織が解散しており、イベントの減少から住民同士の関わり合いが希薄になってしまっている。

関係機関について

総持寺団地では住民の方だけでなく福祉委員、民生委員、地域包括支援センター、CSW、東保健福祉センター、UR コミュニティ、社会福祉協議会等複数の関係機関の方々が協力し誰でも気軽に楽しくつながれる見守り「あい」と安心がある団地に向け様々な活動がなされている。過去行われた活動として、昔懐かしの写真展、カフェよりそい等がある。

活動における課題、目標（成果目標）

課題：住民同士の関係性、コミュニティの希薄化、それらを創造する機会の不足

目標：総持寺団地に住民が自発的、継続的な関係性を築くことができる機会や環境が存在している状態

活動内容

① ささえあいミーティング

月に一回総持寺団地の集会所に集まりイベント班、情報おとどけ班、自分達を含む大学生グループから活動の進捗についての報告、提示された課題や今後の活動の予定、過去の活動の振り返り等を住民の方、関係機関の方々、学生で共に話し合っている。

② よりそいカフェ

追手門学院大学の学生により企画され立命館学生や関係機関の方々も協力し、茶菓子と共に住民が学生との会話を楽しみ、加えて学生がスマホ教室を行うカフェを開催した。

③ よりそいガーデン

UR コミュニティの方々が中心となり、ガーデニングキララの協力のもと、住民を中心に

集会所前の花壇の植え替え及びコミュニティーガーデンに関するグループワークを行った。

活動を通しての気づき

- ① 関係機関の方々と一体となりニュースレター作成及び広報、必要物の用意、協力者を集める等、学生の意見さえ団地におけるイベント、取り組みへと繋がっていく新たな活動の機会を生み出す貴重な場であった。一方で関係機関や学生の間に立場や総持寺団地での活動に対する考え方の違いが存在しているように感じられた。またミーティングでの発言者の偏りが、参加者の物理的距離を近づけることで改善が見られた。
- ② スマホ教室という企画を通して実際に住民の周囲の人との関係性や、生活をする上での困りごと等現場の声を聴くことができた。総じて現場を知るために一定の効果があったように感じた。一方で学生と住民が店員とお客様のような関係性になってしまっていて、住民の生活の実態に寄り添ったものではなかったと感じた。
- ③ 元々花の手入れ等が好きな人はもちろん花を見る、会話することだけを目的とした参加者の方もおり、花を中心としたコミュニティ形成に貢献していると感じた。加えてグループワークでは作業の中住民同士での意見交換等会話が促されていた。一方で最小限の外部の関与で活動を継続させることが出来るかが問題視される。

今後に向けて

今後は第一に目的と結果の差異を小さくするために関係機関の立場、役割に対する理解を深め、自分達の役割、適切な働きを考えることが必要だと考えた。第二に住民の自発的な行動を促すために住民は常に活動の機会やイベント等を提供される側であるという考え方を改めることが必要だと考えた。第三に継続的な活動や住民が主体となるように住民が運営に大きく関わる新たなコミュニティ参加への機会を促す必要があると考えた。

活動を通して自分達に生じた変化（まとめ）

初期は行動を起こし、変化を生むことが活動において重要ではないのかと考えていたが、主にミーティングの場と講義内容を通して現場に出向き、情報を集めて“現場で本当に求められていること”を吟味することがより重要であると実感した。加えて総持寺団地自体やその住民についての理解を深めることが出来た。現在立命館学生を中心とした団地における活動も計画しているが、自分達の過去の気づきを活用し目標と内容の方向性が同じかを常に意識するようにしている。

公益財団法人 大阪府国際交流財団
国際理解教育外国人サポーター派遣事業

岡田 羽叶
KANG CHANGGYU

(公財)大阪府国際交流財団(OFIX)は、多文化共生機能の強化を目標に掲げ、大阪の国際化と府民の国際交流の促進を図るため、「①外国人の受入促進、活動環境の整備」「②グローバル人材の育成」「③国際交流情報の発信」の3つを柱に活動している。私たちは今回、主に②に取り組んだ。②として OFIX は、外国人サポーターを大阪府の小・中・高等学校や支援学校等の国際理解教育授業へ派遣している。2022 年度に行われた教員・児童・生徒へのアンケートでは、授業に対する満足度が 96%であった。

私たちは、大阪府内の様々な学校へ行き、多様な国のサポーターたちの授業の進行で必要なサポートに加えて授業の参加や実施などを行った。また、Asia Week ではブースの運営のサポートをした。

授業

授業では、外国人サポーターの授業に参加、授業の進行の手伝い
韓国の文化を紹介する授業を実施した。



Asia Week

Asia Week では、外国人サポーター
ブースの案内と手伝い
私たちのブースの時間では、韓国
語で名前を書く・韓国伝統遊びト
ウホをした。



活動月	主な活動内容
10 月	・ 国際理解教育や Asia Week の今後の活動について打ち合わせ (参加する国際理解教育授業、派遣先の決定) ・ Asia Week への出展(外国人サポーターの手伝い、ブース運営など) ・ 国際理解教育授業への参加、サポート
11 月	・ 国際理解教育授業への参加、サポート ・ 授業後アンケートの結果集計 ・ 国際理解教育授業の実施(韓国の文化紹介の授業)
12 月	・ 授業後アンケートの結果集計

チームの目標

OFIX が行っている国際理解教育の派遣先の活動に積極的に参加し、活動先にフィードバックを行うことで来年度以降の国際理解教育がより良いものとなるようにする

個人の成長

1. 授業したことで、日本人に対するイメージが良くなった。(KANG)
2. 多文化共生は難しくないと感じた。(岡田)

感想

・決められた内容のもと活動していたため、自分達が自ら動いてすること、解決できることは何かを考えることが難しかった。しかし、その中でもできることを見つけてここまでやってこられたことは、自分にとって成長にもつながった。そして何より受講以前から目標としていた多文化共生について真に考えることができて良かった。(岡田)

・今学期の授業では、活動しながら異文化交流の重要性を感じた。日本は他国の人に厳しいと聞かされていたが、実際に活動に参加し、現場で授業してみて、他国の文化を積極的に学ぼうとしていて良かった。また、私も日本に対する印象が良い方向に変わる機会になって良かった。(KANG)

私たちからのメッセージ

多文化共生には知る・知ってもらうことから始めて、互いに興味を持つことが大事だと感じた。知ることは難しいことではない！ 国籍に関係なく個人として考えれば、気軽に交流できる！

楽しくなく楽しく、その「型」を身につけて

山口 洋典（立命館大学共通教育推進機構教授）

＜担当プロジェクト＞

【衣笠】

- ・時代祭応援プロジェクト
- ・堂本印象美術館広報プロジェクト
- ・衣笠キャンパスプロジェクト

【OIC】

- ・茨木みずとわプロジェクト
- ・団地コミュニティの活性化
- ・国際理解教育外国人サポーター派遣事業



「今、みなさん自由に苦しんでいるんです。それで、私はあえて型をつくることに挑戦しています。」これは2023年12月25日、静岡県浜松市で行われた認知症予防のサロンの会場で、テルミン奏者の竹内正実さんが仰った言葉です。竹内さんは1993年に音楽留学をされ、電子楽器「テルミン」の演奏法を学び、現在は浜松を拠点に演奏活動をされています。そんな音楽家がなぜ認知症サロンで語っておられたかという、2016年の12月25日、つまり「その日」から7年前、横浜市内で開催されたクリスマスコンサートの最中に脳出血で倒れ、そのリハビリに取り組んだ経験が、認知症の防止にも効果的ではないか、という仮説のもと、浜松市の芸術文化分野の補助金を活用して、対話の場を開いているためです。

冒頭の言葉は、「慣れない楽器演奏を楽しむコツは何ですか？」といった質問に対する答え（あるいは応え）として返ってきたものです。そして、好き勝手に演奏することと、きちんとした音階を取りながらきれいに演奏することでは、演奏に対する継続的な意欲が異なるため、「サロン」と「教室」とは音楽家としてのモードを変えて向き合っているつもりである、といったお話をいただきました。この言葉を伺って、私は下手の横好きでギターを弾くのですが、独学で、しかし楽しみながらやってきたからこそ、これ以上の成長はないか、と感じた次第です。と同時に「変な手癖がついてしまっているかもしれないけど、今からでも教わり始めるのは遅くないかもしれない」とも思いを巡らせました。ふと、この授業「シチズンシップ・スタディーズ」において、私は受講生の皆さんに対して、どこまでの学びや活動の「型」を示すことがで

きたか、自らの姿勢を振り返ってみました。シチズンシップ・スタディーズは、立命館大学サービスラーニングセンターの科目の中でも、サービス（活動）とラーニング（学習）のバランスが最も均衡している、そんな科目です。しかし、通常の授業と同じく1セメスターで完結し、かつ、通常の授業と同じく毎週1回1コマの時間が皆さんの時間割に入っています。教室に行くだけでは完結しないサービス・ラーニングの理論や方法論を第1回・第2回・第4回・第8回・第11回・第12回の6回分で伝えてきたのですが、果たしてどこまで皆さんが自分たちの活動を設計し評価することができているか、つまり私がこれまでインディアナ大学のロバート・ブリングル先生やミシガン大学のアンドリュー・フルコ先生から私自身が学ばせていただいたサービス・ラーニングの「型」を、どこまで皆さんに教えられたか、授業の終盤において自分自身に問いを向けた次第です。

そうした中、2024年の幕が開けると、元日には令和6年能登半島地震、2日には羽田空港で日本航空516便衝突炎上事故、痛ましいニュースが報じられました。きっと、当たり前前の日常が明日も続くわけではないということを改めて多くの人々が痛感していることでしょう。亡くなられた方々に哀悼の意を表すると共に、これからも他者との関わりを通じて学び成長する機会を享受できる私たちは、引き続き丁寧な生き方、働き方を重ねていくこととしましょう。その際、「型」という言葉を手がかりとして、「自由」な中での「楽」な方法が必ずしも「楽しい」わけではなく、「楽しい」ことが必ずしも「続けられる」わけではないことを思い起こしていただければ幸いです。

社会と自分のつながりを考える

小辻 寿規（立命館大学共通教育推進機構准教授）

<担当プロジェクト>

- ・草津宿映えスポット Map 製作プロジェクト
- ・草津ブランドの PR 戦略を考えるプロジェクト
- ・草津市×立命館 大学生のまち活応援プロジェクト



令和6年能登半島地震により被害を受けられたみなさんに、心よりお見舞い申し上げます。

みなさんも帰省先や旅行先で影響を受けられたかもしれませんし、予定の変更を余儀なくされたかもしれません。

また、滞在先によってはほとんど影響を受けなかったとしても、現地にいと想定される友人・知人の安否確認をされるほか、関連のニュースの収集にあたられていたと思います。被害を受けられた方々のために何かできることがないか考えられている方もたくさんおられるでしょう。共にできることあれば、やりましょう。

このような情勢ではありますが、2023年9月から2024年1月にかけての長期の活動お疲れ様でしたと労わせてください。楽しかった思い出があれば、苦労した思い出もあるでしょう。

活動の中では理不尽な思いをしたこともあるかもしれません。受講生のみなさんもこれまでの人生の中でも同様の体験をされてきたとは思いますが、人生ってその繰り返しのような気がします。

そして、理不尽な中から、自分が弱い立場に立つこともあるということを知ること、すなわち弱者になりうることを自覚することはとても大切だと、私は考えています。

社会は弱者とどのように向き合って、どのように包摂していくのか。どこまでを保障し、どこからは保障の範囲外と考えるのか。自分の中でしっかりと意見をもてる人になっていただけると嬉しいです。

授業の中ではあまり話してこなかったのですが、私の師匠に2023年7月31日に亡くなった立岩真也という社会学者がいます。立岩さんはテレビや新聞などにもよく出られていたのでご存知の方もいるでしょう。

彼は実家や施設から出て地域で暮らす重度全身性障害者の自立生活について研究し、『生の技法』という書籍を共著で出版しています。

立命館大学に着任してから彼は生存学研究センター（現・生存学研究所）を立ち上げ、「障老病異」の研究をしてきました。「障老病異」は仏教用語の四苦である「生老病死」をもじった造語です。「老いること」、「病気になること」、「障害をもつこと」、「それぞれが異なった身体をもって生きること」の4つをあらわしています。もちろん、その4つについての苦しみを抱えている人はたくさんいますが、どうしてその苦しみを抱えてしまうのか、どうしてその状態を改善する必要があるのかも問うものでした。その研究の中には、当事者たちの社会運動の歴史、主張、人生などをアーカイブすることも含まれています。彼は「学者は後衛に付く」といい、研究面や情報発信面での支援をし、社会学者として通じた人でした。様々な当事者や活動家を院生として受け入れたほか、共に研究した人でもありました。

立岩さんは自身も社会活動家の側面もあり、「障老病異」の支援に携わるNPO法人の理事長の責務を担うほか、様々な困難を抱えた人を物心両面から支援している人でした。ほかの活動家や院生を支援するだけでなく、自分も動かなければ、社会を変えられないことをよく知っておられたのでしょう。

立岩さんは自分の目の前にあるものに常に向き合い、それを言語化し、書籍や講演、ホームページなどで形にして発信する人でした。私も負けられない。そう強く思っています。

みなさんは目の前にある社会と向き合いました。今後は、どのように動いて経験を活かしていけますか？